

第1章 経験的性格の信仰か組織制度偏重のそれか（4）

（続き）

実際、牧師・信徒の双方で同様に意識が高まり、現状を懸念する思いが強くなっているところからも、希望の兆しが感じ取れる。外面的にはいかにも成功を取めているように見えるものの、今日の信仰生活は何かしら重大な点で真つ当でないと思われ、それが気がかりで、危惧の念が拭い切れないのである。こうした疑問の声が、深刻な懸念のもと、ますます高まりつつある。当該の教派や宗教団体に批判的な人々によってではなく、誰よりも深くそこに身を置き、その働きに携わっている人たちによってである。そして、この種の問題が教会や教派の会合で公^{おおやけ}に議論されることも、日を追って多くなっている。事実、自身の分析を真剣かつ徹底的にし始めた教会が今まさに、一つならず出てもいる。とはいえ、このような自己評価というのは、そこで間違いなく、きつい経験も余儀なくされるものである。しかも、その結果、教会がどこに向かうのか、誰にも分からない。クレーマーも現状を評し、次のように述べている。

使徒的感性の復興によって新たに意識が高まり、憂慮が内に深まっているのが明白なこと。神学的思想が新たになり、それに触発されて、キリスト教的生や伝道の新たな在り方を探る試みがなされていること。さらには・・・といったことを見るとき、それらは全体として、今や教会の根元的改革が不可欠との思いが強まっていることを確実に示していると言えよう。おそらくは、16世紀のあの宗教改革以上に根元的なそれが。なぜなら、教会が神の呼びかけにいかに応えるか、その応答の有りようを再検討し、再構築するよう、聖霊とこの世界のいずれもが我々に迫っているからである。^{23, (21)}

実際、組織制度偏重主義の病弊を除去すべきとしたら、そして活力ある新約聖書の信仰を取り戻すべきとしたら、自身がいかなる存在で、そのいのちは何に基づき、その働きはどうあるべきかについて、教会はより深くより明確な理解を持たねばなるまい。これがゆえ、教会の教育的取り組みは確固とした神学的基盤に立たねばならず、教会の務めはそうしたプログラムを一つの主要な手立てとして、それによって・それを通して現実のものとしてゆくのである。このような神学について、幾つかの面から述べる。そこから発展する教育の哲学について、系統立てて明瞭に記すこと。そして、そこからまた、教会のいのちと働きに資する指針として考えうる実際的な事柄を幾つか提言すること。それが、本書の意図するところである。

これはすなわち、新約聖書のキリスト教信仰が経験的性格を本質としていることを理解し、そこから見出される結果に照らして、我々自身の実情を真剣に見詰めようとするものである。追って示す提言のあるものについては、極端に過ぎると思われる人たちもいるかもしれない。だが、その種の実践は、新約聖書の時代にあってはさほどのものだったとも思われぬ。我々にそのように見えるのは

むしろ、我々が知らずのうちに 新約聖書の有りようからそれほどまでに大きく外れ、^{みづか}自らの信仰をかくもソフトでイメージなそれにしてしまったからにすぎないからではなからうか。我々はそれを知らずに、組織制度偏重の道を相当なところまで進み下ってしまったのである。事態の深刻さからして、これに対処するには、好むと好まざるとにかかわらず、抜本的な措置をもってしか始まらないであろう。いみじくも、トゥルーブラッドも次のように語っている。

かかる状況下、何にも増して明白な真理を一つ挙げるとしたら、それは、根本的な変革をもってしか我々はこれを打破しえない、ということである。旧態依然の教会で生気のない決まり事をするだけだとしたら、そのやり方を多少改善したとしても、我々はまたぞろ お手上げになるであろう。昨今の教会は、聖歌が少しばかり改められたからといって、あるいは説教が多少良くなったからといって、はたまた日曜学校の組織が少しく改良されたからといって、それでさしたる変化が生まれるとは思えない。実際、これらの多くはすでに、かなり良く出来てもある。なのに、さほどのことも起こりそうにないのだ。キリスト教信仰そのものではなく、別のところに関心が向けられているかぎりは、そう思われる。²⁴

^{こんにち}今日、教会は容易ならざる問題に直面している。すなわち、引き続き、一般受けする それゆえ多くの人々を惹きつけられる、どちらかと言えば 楽で緩いタイプのキリスト教を続けるのか。それとも、修養や自己放棄といった、新約聖書の信仰に特徴的な 困難かつ根元的な事柄に身を^{ささ}献げるのか。そのいずれに進むのか、という問題である。人々は総じて、きついことは避けたがるため、後者が一般受けすることは考えられない。現今の世代が成長して大人^{おとな}になったのも、こうした緩やかで受けの良い信仰の中でだった。彼らはそのようなキリスト教しか知らないため、それがその信仰のしかるべき在り方だと思いがちである。しかし、よくよく考えてみると、次のような思いが払拭できず、頭を悩ませてやまない。すなわち、活力を得る道はただ一つ、おそらくは—もしかすると だが—困難な道しかないのかも、との思いである。根元的な変革の道であり、いのちに満ちる経験的信仰に至る道は ただ一つ、それしかないのかも、という思いである。

かくして、教会は今や、自身を吟味し直すという 痛みを伴うそのプロセスを通るよう求められていると言えよう。現代の世界において、^{みづか}自らの欠くべからざる本質とは何なのか、そしてその務めと使命はどうあるべきなのか。それらについての再検討である。いずれにせよ、そこに横たわる難題のゆえ、これに続く変革は、次のようなときにのみ、またそうして初めて生じると思われる。すなわち、教会とはそもそもいかなる存在か、そして今日のこの世界において ^{こんにち}それが大切にすべきはいつたい何か。これらについて 教会のリーダーたちがより深くより明確な理解を持つに至ったときのみ、またそうして初めて、それは生まれるということである。

対話の必要性

本書で行なう提言については、誰もが皆 そのすべてに同意することはないかもしれない。だが、本書での論考が刺激となり、キリスト教信仰に基づく建設的な議論が促されることはあろう。そのようにして、今日の教会が神の御旨に適った歩みをするにはいかにあるべきか、その理解をよりの確なものにしてゆけると考えられる。もちろん、この種の議論はキリストの心をもってなさねばならず、非キリスト教的な論争に堕してはならない。がしかし、活力ある信仰には、その基本的側面として、論じ合う自由と異論を唱える自由が欠かせない。これに対し、教義が固定化されたり、探究する自由が否定されたり、さらにはそれが誠実なものであっても、問うこと自体が拒絶されて よしとはされなかつたりするようなこと。それらはすべて、信仰が組織制度偏重に陥ったときに それを示す典型的なしるしと言える。

なお、本書で提示する実際的提言については、作業仮説⁽²²⁾として これを見るべきは言うまでもない。〔そうしたものを提示するのは、〕教派はもとより 組織と言われるものの構造を「解体する (torn down)」ことは、初めにながしか 現状に取って代わるより良きものを用意してからにすべきであって、それまでは いかなるものであれ、それはすべきでない、と 筆者が確信しているからである。その意味で、以下に記す提言が人々の対話を触発するとともに、その基となることを期待し、また そう信じてもいる。すなわち、牧師、教育関係者、教派のリーダー、熱心な一般信徒、大学生、神学生など、この時代における教会のいのちと働きに心から関心を寄せる者たちの対話である。と同時に、この対話は一貫して、答えを探求するものでなければならない。単に提言に反対するだけでは、問題の解決に 進展はほとんど見られないであろう。

本書で論じる諸問題は極めて重大なもので、それゆえ、その分析は厳密かつ妥当なものでなければならない。実際、現状の評価というのは、それが我々自身にあまりに近くあるため、いつの時も容易ではない。当初の意図やその失敗に それぞれが深く関わっていて、客観的であることは難しい。加えて、現在の経験というのは、時間的にも空間的にも限定されたものでしかない。そうであれば、我々は現在を 歴史的な視点から見ねばなるまい。続く三章は、そうした観点から、歴史を振り返って 事を見ようとするものである。

注

1. *Yearbook of American Churches for 1961* (New York: National Council of the Churches of Christ in the U.S.A., 1960) 264, 279.
2. Gibson Winter, *The Suburban Captivity of the Churches* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1961) 30.
3. Martin E. Marty, *The New Shape of American Religion* (New York: Harper Bros., 1959) 15.
4. Claire Cox, *The New-Time Religion* (Englewood Cliffs NJ: Prentice-Hall, Inc., 1961) 1-2.
5. A. Roy Eckardt, *The Surge of Piety in America* (New York: Association Press, 1958) 43.
6. Will Herberg, *Protestant, Catholic, Jew* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1955) 89-

90.

7. Ibid., 108.

8. William H. Whyte, Jr., *The Organization Man* (New York: Simon and Schuster, 1956) 254.

9. Ardis Whitman, "What Not to Tell a Child about God," *Reader's Digest* (February, 1962): 81-82.

10. Edmund Perry, *The Gospel in Dispute* (Garden City NY: Doubleday & Co., Inc., 1958) 16.

11. Marty, 117.

12. Paul Hutchinson, *The New Ordeal of Christianity* (New York: Association Press, 1957) 113.

13. Herberg, 276.

14. Quoted in Eckardt, 158.

15. Winter, 100.

16. Hendrik Kraemer, *A Theology of the Laity* (London: Lutterworth Press, 1958) 127.

17. John W. Meister, "Requirements for Renewal," *Union Seminary Quarterly Review* XVI (March 1961): 254-55.

18. Ibid., 253-54.

19. William Clayton Bower, *The Curriculum of Religious Education* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925) 138-39.

20. James D. Smart, *The Rebirth of Ministry* (Philadelphia: The Westminster Press, 1960) 172.

21. Ibid., 162.

22. Elton Trueblood, *Your Other Vocation* (New York: Harper & Bros., 1952) 32-33.

23. Kraemer, 99.

24. Trueblood, 28.

訳注

(1) アメリカのプロテスタント神学者。1916～2002年。シカゴ大学神学院教授、プリンストン神学校教授等を歴任。教会と社会の問題を中心に論じた。

(2) [] 書きは、訳者の補筆挿入。

(3) アメリカのジャーナリスト。

(4) アメリカのプロテスタント神学者。1918～1997年。米国宗教学会会長、リーハイ大学宗教学科科長等を歴任。特にユダヤ教とキリスト教の関係について、アメリカを代表する論者の一人となった。

(5) ユダヤ系アメリカ人の宗教社会学者。1901～1977年。ドルー大学で教鞭きょうべんを執った。

(6) 使徒言行録に「(この)道」という表現で繰り返し出てくる「主の道」のこと。「わたしは道」(ヨハネ 14:6)と言われたイエス自身の言葉をも示唆。

(7) アメリカのプロテスタント・キリスト教史家。1928年～。元・シカゴ大学神学院教授。とり

わけ、近代アメリカキリスト教史の学者として著名。

(8) アメリカの社会学者、評論家。1917～1999年。社会や組織と個人の関係について、特に文化的圧力の観点からこれを考察したことで知られる。

(9) 選挙運動などで使われる丸いプレート。候補者の名前や写真、スローガン等が印刷されていて、支持者が胸などに付ける。"I/We like ... (私/私たちは・・・が好き)" "I/We love ... (私/私たちは・・・が大好き)" とは すなわち、「・・・支持」「・・・熱烈支持」の常套フレーズ。

(10) カナダ生まれのアメリカ人執筆者。1905～1990年。社会問題、人間関係、教会、宗教等について数多く論じ、長年にわたって『リーダーズダイジェスト』の寄稿者も務めた。

(11) アメリカのプロテスタント神学者、宗教学者。1923～1998年。ノースウェスタン大学の宗教学科創設に尽力。長年にわたり、学科長を務めた。キリスト教にとどまらず、仏教をはじめ世界の主要宗教について研究し、論じた。

(12) アメリカの作家。1893～1960年。ニューイングランドの生活を風刺した作品で知られる。1938年、フィクション分野でピュリッツァー賞を受賞。

(13) 前出 (1) のギブソン・ウインター (Gibson Winter) 。

(14) オランダのプロテスタント宣教学者。1888～1965年。信徒の神学的・宣教論的位置づけを論じて著名。以下の引用文は、その代表的著作の一書 *A Theology of the Laity*. (邦訳『信徒の神学』) より。エキュメニカルな運動にも尽力した。

(15) *A Theology of the Laity*. は『信徒の神学』との書名で邦訳が出されているが (小林信雄訳、新教出版社、1960年)、ここでは、エッジの引用原文から 私訳を行なった (邦訳書では、153～154頁に訳出) 。

(16) アメリカの合同長老教会牧師。1916～1974年。合同長老教会神学教育協議会事務局長、同・キリスト教教育協議会委員、プリンストン神学校理事等を歴任。関連分野の専門誌に多数寄稿した。

(17) マタイによる福音書 16章25節。

(18) 20世紀前半の米国キリスト教教育運動の主導者の一人。1878～1982年。シカゴ大学神学院教授として、キリスト教教育の研究に科学的手法を採用。関連分野の執筆も活発に行ない、多年にわたって アメリカのキリスト教教育に影響を与えた。

(19) 20世紀アメリカを代表する聖書学者、キリスト教教育学者の一人。1906～1982年。ニューヨークのユニオン神学校教授として 長年、神学教育に携わった。教会論に基づき、神学的アプローチによるキリスト教教育論を展開。主著の一つ *The Teaching Ministry of the Church*. は、『教会の教育的使命』との書名で邦訳が出されている (安村三郎訳、日本基督教団出版部、1958年) 。

(20) クエーカー出身として知られる、20世紀アメリカの著名な神学者、哲学者。1900～1994年。スタンフォード大学、アールハム大学他で教授を歴任し、多くの書を著わす。ハーバード大学、スタンフォード大学で、チャプレンも務めた。

(21) (15) に同じ。邦訳書では、116頁に訳出。

(22) 研究や試行、実験を進める過程で暫定的に有効とみなされて立てられる仮説。

(矢野 眞実諷)